

12. それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。

これが律法であり預言者です。

## 説教

イエスさまは、これまでの7章の説教の結論としてこう言われました。「それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」(12)

「律法(単数形)」は、十戒を中心とするモーセの律法のこと、時代が変わっても変わることのない神のみこころです。「預言者(複数形)」は、その「律法」を各時代に適用させて人々に教える「預言者たち」のことで、「律法と預言者」と言えば、要するに旧約聖書全体を意味します。つまり、旧約聖書は結局「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい」に要約される、とイエスさまは言われたのでした。聖書、特に旧約聖書と言えば、いろいろとたくさん書いてあって何か難しい感じがします。でも、イエスさまは、旧約聖書全体を一言で要約すると、「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい」になると教えてくださいました。そう言われると、「え？聖書ってそんなに簡単なの？」と驚きますが、その通りで、イエスさまの教えは実に単純で的確です。

「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」この直訳はこうなります。「人々があなたがたにしてもらいたいことがあれば、すべて、そのようにあなたがたも彼らにしなさい。これが律法と預言者たちだ。」

家族にせよ、友人にせよ、私たちは他人にあれこれ不平を抱いて要求するものです。自分にもっとこうしてくれとか、こんな風に言いやがってとか、こんなんじゃない困るとか、人への要求は尽きることがありません。これを身近な家族で考えると、「妻が自分にもっと優しくしてくれればいいのに」とか、「夫は自分をもっと愛してくれたいのに」などと不満に思います。子どもなら「俺をもっと認めてくれ」と親に思うかも知れませんが、親は親で「このガキ、言うことを聞け」と思うでしょう。嫁姑にはさらに複雑な不和があるかも知れません。

これらはすべて「自分にしてもらいたいこと」です。「人々があなたがたにしてもらいたいこと」です。イエスさまは、こうした他人への要求それ自体は否定なさいません。これはこれで、やむなく自分の心に「自然と」むくむく湧き起こる感情なので、どうしようもありません。とは言え、こうした「人々があなたがたにしてもらいたいこと」は肯定しつつも、それを前提としながら、それを人に要求する前に、まずは自分がそうしろと言われます。

すなわち、「自分にしてもらいたいこと」、「人々があなたがたにしてもらいたいこと」、それをそっくりそのまま「あなたがたが彼らにしなさい」と教えるのです。そうして、「これが律法であり預言者」、すなわち聖書全体が教えるところであると言うのでした。

それにしても、「人々があなたがたにしてもらいたいこと」とは、何とも生々しく切実な欲求です。そして、他人に要求するその通りに自分がその人にしてあげる、これこそ「律法」だとイエスさまに教えられると、律法とは何ともリアルなものだと思わざるを得ません。既に、イエスさまは、「殺してはならない。」(5:21-26)「姦淫してはならない。」(5:27-32)「偽証してはならない。」(5:33-37)という具合に5章で十戒について教えました。そして、ここでは、「人々があなたがたにしてもらいたいことはすべて、そのようにあなたがたも彼らにしなさい。これが律法と預言者たちだ」と「律法」を定義しなします。「人々があなたがたにしてもらいたいこと」を自分がする、これが「律法」の本質なのです。

どうして他人を「殺してはならない」のかと言えば、それは、結局は自分が殺されたくないからです。どうして「姦淫してはならない」のかと言えば、自分も伴侶に姦淫してもらいたくないからです。どうして「偽証してはならない」のかと言えば、自

分も裏切られたくないからです。これは最も生々しく切実な要求です。

十戒、すなわち「律法」とは、要するに、すべて「人々があなたがたにしてもらいたいこと」を行うことに他なりません。「律法」とは、何か機械的で、字面だけの、冷たく、無表情で、無機能的なものでは断じてありません。自分とかけ離れた、関係の無いものではありません。それは実は最も「自分」と関わりのあるもので、その中心には常に「自分」があります。私たちは自分勝手に罪を犯すのですが、勝手に罪を犯したその相手もまた人間であり、それが自分自身だと考えてみるというのが今日のイエスさまの教えです。「殺されたくなければ殺すな！」これが「律法」です。「律法」には血が通っているのです。それも私たちの生々しいドロドロとした熱い血が通っています。そこにはビリビリ・ビリビリと神経が通っているのです。十戒は、「神と人を愛する」教えで、これを守れば神が喜び、これを守らなければ神が悲しみ、怒る、言わば神の人格そのものだという話は何度もしてきました。でも、それと同時に、人間にとって最も切実な教え、それが「律法」なのです。

とは言え、そう教えられてもそう簡単にできるものではありません。なぜなら、「人々があなたがたにしてもらいたいこと」はあくまで「人々があなたがたにしてもらいたいこと」なのであって、それを自分が他人にしてあげることは極めて困難です。と言うより、不可能です。私たちは罪人なのです。墮落しています。自分中心、自分勝手です。自分のことしか考えません。他人はどうでもいいのです。困ろうが死のうが関係ありません。神と人を無視して、自分勝手、自分中心、これが人間の墮落、罪の本質です。こうした墮落の現実には、個人的な関係にとどまらず、社会問題、国際的な問題とも深く関わります。自分だけよければ他人は死んでもいい、これを民族に当てはめると「民族エゴ」となります。官民癒着の独占資本の利潤追求による帝国主義、それに伴う侵略戦争、さらには原発による棄民政策に至るまで、あらゆる社会問題の根底には自分のことしか考えない人間の罪があります。

それでは、どうしたらいいのでしょうか。罪深い私たちに救いの希望は無いのでしょうか。あります。それは神の愛です。神の愛に私たちの救いの希望があります。神は私たちの天の父です。そして、罪深い私たちでも見捨てず愛してくださっています。私たちは愚かで罪深く、自分勝手な要求しか祈り求めることを知らないのですが、それでも、天の父なる神は、罪深い私たちの祈りを真剣に聞いてくださいます。そうして、私たちが求める以上の「良いもの」をくださいます。それは世界で最も価値ある最高に優れたすばらしい「賜物」「贈り物」です(マタイ 7:11)。そして、神がくださった最も切実ですばらしい神の賜物は、神のひとり子、イエス・キリストです。「神はそのひとり子をお与えになったほどに世を愛され」ました(ヨハネ 3:16)。何一つ神のみこころを行えない、全的に墮落している私たち罪人の身代わりとなって、イエスさまは父なる神に完全に従い、十字架で死なれて、その義を私たちに転嫁してくださいました。私たち罪人は、そのイエスさまの義をただでいただいて、何一つ神に従い得ないにもかかわらず、イエスさまのように 100%完全に神に従い抜いた義人と認めていただいて、天国に行くことができます。神の怒り、地獄の滅びを免れて、神に受け入れられ、神に喜ばれて、天国に行くことができます。これは私たちがいただける最高の恵みです。神がくださる最高の賜物です。最高に価値ある優れた神の「贈り物」なのです。神に愛され、受け入れられ、喜ばれて、天国に行ける以上の祝福はこの世にありません。神に愛されている、これが何よりの祝福です。

「それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」あまりに自分勝手に幼稚な願いですが、それでも私たちは神に祈り求めます。「自分にしてもらいたいこと」を祈り求めます。それはそれでいいのです。何でも欲しいものを求めていいのです。「求めなさい」と言うのですから、求めてかまいません。そして、神はそれに応えて、最善をなしてくださいます。神は、私たちが求める幼稚な願い通りではなくて、神が見て最高の宝をくださいます。それは、いわば神にとっては、神にとっての「自分にしてもらいたいこと」です。神にとっての、最善の、最も良い宝です。すなわち、神ご自身が「律法」を實踐して、「自分にしてもらいたいこと」を私たちに施してくださっているのです。「最も良いもの」を常にくださる神の恵みを受けながら、イエスさまは、神がそうしてくださっているように、「自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい」と教えます。

「自分にしてもらいたいこと」、これが最高の規範です。これは最も切実な願い、要求ですが、でも同時に、これが他人に対して向けられた時に、最も崇高な規範となります。それは実践することが困難であっても、間違いなく最高の規範です。まさしく「律法であり預言者」です。

この罪深い罪人を赦し、最善をなしてくださる神の恵みに感謝しながら、「自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそ

のようになさい」、このイエスさまの教えを誠実に実行していくお互いになりたいと願います。